

石原吉郎とキリスト教との出会い

—北條民雄からキリストへ—

柴崎 聰

日本大学大学院総合社会情報研究科

Yoshiro Ishihara's Encounter with Christianity

—From Tamio Hojo to Christ—

SHIBASAKI Satoshi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Yoshiro Ishihara is one of the most famous Christian poets in Japan. According to his autobiographical sketch, in 1938 he read *The Philosophy of Tragedy* by Lev Shestov and learned about the Russian novelist Dostoevski. Because of that, Ishihara became interested in Christianity, to which Dostoevski was deeply committed. How did he learn about Shestov? I think that it was through the work *A Conception in the Hansen's Disease Hospital* by Tamio Hojo, a Japanese novelist, for, in the scene of three patients' conversation in the novel, *The Philosophy of Tragedy* is mentioned. I am sure that Ishihara must have been interested in it. I conclude, therefore, that Ishihara was led to Dostoevski through Shestov and was led to Christianity through Dostoevski.

1 はじめに

私は、1972年に詩人の森田進氏と出会った。その紹介で石原吉郎の詩集とエッセイ集を読み始めた。その後、東村山市に住み、文学を愛好する3人で詩の読書会を開き、現代詩文庫『石原吉郎詩集¹』と『新選 石原吉郎詩集²』を読み通した。その間、私は池袋で石原吉郎に直接会い、エッセイ集『断念の海から³』の出版を快諾してもらった。

私は2度、石原から電話で聖書箇所を尋ねられたことがある。1度目は、ヨハネによる福音書15章13節の「人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし」という箇所であり、2度目は、創世記19章24—26節の、イスラエル民族の信仰の父アブラハムの甥ロトの妻が、後ろを振り返ったために塩の柱になる箇所である。

前者がどのような形で作品に反映したのか、私はいまだに知らないが、後者は、歌集『北鎌倉⁴』の

「塩」という部立てにある「男の子しもロトのごとくにふり向きて塩の柱となることありや」に結実した、と確信している。しかし石原は、意識的にか無意識的にか、「ロトの妻」と「ロト」を取り違えて用いている。短歌の「ロト」の傍らに註が付され、「ロトの妻は後を回顧たれば鹽の柱となりぬ」（創世記19・26）という聖句が添えられている。そのことから判断すれば、意識的に取り違えていると考えるしかないであろう。

石原吉郎の作品にまず出会い、次いで詩人本人の警咳に接し、2本の電話によってその関心が聖書にあることを知り、改めて石原の詩を読んでいくと明らかになってくることがあった。「石原吉郎とキリスト教」「石原吉郎と聖書」の主題のもとに、石原作品を研究し、読み解いていきたいという思いが私の中に澎湃と湧いてきたのである。

石原と同時代を生きた詩人の安西均は、自らが編集し著した『石原吉郎の詩の世界』の中で、「詩はむずかしいか・5」という見出しのもとに、「石原吉郎

の詩がむずかしいといわれる原因の一つに、キリスト教との関係を挙げてもよいだろう」と記し、それに続けて、石原とキリスト教の経緯が語られ、「しかしながら、詩人石原吉郎とキリスト教について、まとまった解明・論評は、いまのところほとんど現れていない。彼について語る詩人や評論家は少なくないにもかかわらず、なぜか多くは避けて通っていく感じさえする」と嘆いている⁵。私も同感であった。

石原詩への解釈・評論の大半は、シベリヤ体験の視点からなされる傾向を持ったことは確かである。それらが重要な研究・批評であることを十分に評価したうえで、私は、その視点から石原の作品を見ていくだけでは十分ではない、と考えるに至った。キリスト教や聖書の視点から、石原吉郎の詩文学の核心に迫っていきたいというのが、私の研究動機であり、研究意図になったのである。

2 「自編年譜」

私は、2007年度に、博士論文「石原吉郎研究——詩文学の核心」を提出し、学位を授与された。論文提出後、石原の作成した「自編年譜」の中で、どうしても気になっていた疑問を解明しなければならぬと考えるようになった。

本論文「石原吉郎とキリスト教との出会い——北條民雄からキリスト」は、その疑問を解明する道程を記したものである。

石原吉郎の「自編年譜」「一九三八年(昭和13年)二十三歳」の項に、次のような記述がある⁶。

東京外語卒業。大阪ガスに入社、研究部に勤務。六月、徴兵検査のため、父とともに初めて伊豆を訪ねる。修善寺の小学校で行なわれた検査の結果は第二乙種・第一補充兵役。この頃シェストフの『悲劇の哲学』を読んだことが契機となり、集中的にドストエフスキーを読む。なお不安にかられ、当時唯一のカール・バルトの邦訳書『ロマ書』(丸川仁夫訳)を読む。キリスト教に関心をもち、住吉教会を訪ね、ここでカール・バルトに直接師事したエゴン・ヘッセル

氏(当時松山高校講師)に会う。住吉教会にあきたらず姫松教会に移る。同教会でヘッセル氏より洗礼を受ける。

この年譜から判断すると、石原がロシアの思想家シェストフの『悲劇の哲学』を読んだことによって、ドストエフスキーに深い関心を持ち、集中して彼の作品を読み始めたことが分かる。しかしながら、どのようなきっかけで、また、どのような動機によって、『悲劇の哲学』を読むことになったのかは明らかではない。そもそも、シェストフとは何者であり、『悲劇の哲学』とはどのような書物なのであろうか。

3 『悲劇の哲学』

『世界 日本 キリスト教文学事典⁷』によれば、レフ・シェストフ(Lev Shéstov, 1866-1938)は、ロシアの文芸批評家であり、哲学者である。キエフのユダヤ人の家庭に生まれ、トルストイ、ドストエフスキー、ニイチェらに関する評論に最も定評がある。彼の代表作が、『ドストエフスキーとニイチェ——悲劇の哲学』(Dostoevskii i Nitshe=Filosofiya tragedii, 1903)である。その和訳は、1934年(昭和9年)に河上徹太郎と阿部六郎の翻訳で、芝書店から出版されている。

『悲劇の哲学』は、比較的長い「序」と「ドストエフスキー」と「ニイチェ」という3部から構成されている。第2部「ドストエフスキー」は、河上徹太郎が仏訳と独訳から翻訳をし、第3部「ニイチェ」は、阿部六郎が独訳から翻訳している。両者ともに重訳である。

第2部「ドストエフスキー」の内容を検証していくと、石原吉郎がドストエフスキーによってキリスト教に関心を持っていく心理の航跡が明らかになる。例えば、次のような表現が石原の関心を引き起こさないはずはなかったであろう⁸。

我々にとって、ドストエフスキーは一個の心理的な謎である。此の謎を解く鍵を探すには只

一つの方法しかない。それは出来るだけ真理と現実に接近して之を追求することだ。

「真理と現実に接近して之を追求すること」とは何か。20歳を少し過ぎたばかりの石原には、その接近方法は朦朧としていて濃霧の中にあつたに違いない。さらに本書を読み進めていくと、厳しくも刺激に満ちた断定的表現に遭遇するのである⁹。

大切なことは、ドストエフスキーは人類の未来の幸福を望んではゐない、未来によつて現在が弁護されることなぞ望んではゐないといふことである。彼は現在に対するもつと外の釈明を要求してをり、人道主義的な理想のうちに慰安を見出すよりは壁に頭を叩きつける方が好ましいのである。

すでにシベリヤ流刑を経験していたドストエフスキーと、やっと社会に出て働き始めた石原とでは、人生経験の質量にあまりに大きな差がありすぎた。

シェストフの論述は、『罪と罰』の省察を過ぎて、『カラマーゾフの兄弟』の大団円へと至る。大審判官（通常は大審問官と訳される）について、次のように記されている¹⁰。

民衆が彼〔大審判官〕に負つてゐるのではなく、反対に、彼がその信仰を民衆に負つてゐて、此の信仰が部分的にしる彼の長い、悲哀に満ちた、孤独の生涯を肯定してゐるのだといふことである。彼はその奇蹟や神秘を以て、その知識の權威を以て、人々に臨むことによつて、彼等を瞞して来た。彼は自ら地上に於ける神の代理者だと号した。（〔 〕は引用者）

また、『カラマーゾフの兄弟』に登場する父フォードルと次男のイワンと三男のアリョーシャの会話が引用され、「神の存在」や「永生」についての烈しくかつ深刻な問答が交わされている¹¹。

——「イワン、いつてくれ、神は存在するのかもしれないのか？」

——神は存在しません。

——アリョーシャ、神は存在するか？

——さうです。

——イワン、では永生は存在するか？ どんな、全く瑣々たる永生でもいい。

——いいえ、そんなものはありません。

——全くないのか？

——全くありません。

——といふのは、全然皆無なのか？ 何かあるだらう。完全の無なんてないだらう。

——いいえ、全然皆無です。

——アリョーシャ、永生はあるか？

——ええ、あります。

——神も永生もちやんとあるのか？

——神も永生もちやんとあります。

——フム………多分イワンのいふことが正しいのだらう。」

石原がこのような論考を読み進むうちに、キリスト教や信仰について咀嚼しきれない大量のものを抱き、その核心の見極めを希求しながら、ドストエフスキーや聖書へと深入りしていく姿が見えてくる。しかし、この論文での関心事は他にある。石原が、なぜシェストフの『悲劇の哲学』を読みたいと考えたのか、である。

4 『いのちの初夜』

「自編年譜」の「一九三七年（昭和12年）二十二歳」の項には、「北条民雄の作品と手記を読み衝撃を受ける。衝撃はそれまでの価値観を顛倒してしまうほど強烈なものであった¹²」と記されている。それはなぜであろうか。「北条民雄年譜」によれば、北条は、1934年（昭和9年）21歳の時、「東京府下東村山の癩療養所全生病院に入院¹³」した。その時、石原は東京外国語学校（現・東京外語大学）ドイツ部貿易科の学生であった¹⁴。北条は1914年生まれであり、石原は1915年生まれである。同

世代の青年とのあまりにも隔絶した境遇に、石原は衝撃を受けているのである。

エッセイ「私と古典——北條民雄との出会い」には、最初に出会った北條の作品は、1936年（昭和11年）の『文学界』2月号に掲載された「いのちの初夜」であった、と記されている¹⁵。読書年が1年ずれているが、ここではそれを吟味しない。1936年12月に、作品「いのちの初夜」「間木老人」「癩院受胎」「癩家族」の4作品を収めた『いのちの初夜¹⁶』が創元社から刊行された。しかし、当時の石原にとっては高額であったために、その2年後に、就職してから購入している。そして、1938年に『北條民雄全集¹⁷』が創元社から刊行されるやすすぐさま購入している。以上の経緯は、エッセイ「私の古典——北條民雄との出会い¹⁸」に詳述されている。

石原は、敗戦後、反ソ連行為で重労働25年の刑を宣告され、ソ連によって、シベリヤの強制収容所に収容された。シベリヤ抑留の最後の3年間は、一般捕虜並みの扱いを受け、収容所内の素人劇団のために北條民雄の「癩院受胎」を脚色した経緯を、次のように述べている¹⁹。

抑留のさいごの三年は、ハバロフスクで一般捕虜なみの、多少とも緩和された環境で過ごすことができたが、この時期に収容所内の素人劇団のために北條民雄の「癩院受胎」を脚本に書きおろしたことがある。他愛もない茶番劇や漫才に飽きあきしていた劇団員はさっそくこれにとびついて来た。北條民雄の作品が舞台上演じられたのは、おそらく初めてのことでないかと思うが、演劇は最初から重苦しい、異様な雰囲気の中で行なわれ、幕がおりた瞬間、観客のあいだから異様などよめきが起こったのをおぼえている。

いま私の手許には『いのちの初夜』と『北條民雄全集』の下巻がある。いずれもシベリアから帰還後神田の古本屋で求めたもので、北條民雄の著書とは実に四度目の出会いである。

石原吉郎は、貪るように同世代の北條民雄の作品を読み込み、作品の中に没頭してきた。エッセイか

ら判断すれば、脚本を書き下ろしている時に、手元に北條の原作があったとは考えにくい。そのような状況にもかかわらず、脚本が完成したということは、作品の細部までが石原の脳裏に刻み込まれていたことを意味する。「癩院受胎」の中に、「癩患者」である主人公の成瀬利夫と久留米と船木兵衛の次のような会話がある²⁰。

「この看護婦にもシエストフを読んだりしてゐるのもゐるんですね。僕、意外な気がしましたよ。」

「ああ、あれですか。」

と兵衛は知つてゐるらしく、

「久留米が借したんですよ。『悲劇の哲学』つのでせう？」

と続けて言ふと、久留米が不機嫌さうに言つた。

「あいつら、もの好きさ。」

「さうでもないだらう。しかし僕は思つてるんだが、あいつあ地獄の使者だよ。」

「ふん。」

久留米は軽蔑したやうに傲然と鼻を鳴らせた。兵衛は久留米を指しながら成瀬に向ひ、

「ところが、久留米は悲劇の哲学以前でペシヤンこなつてるんですよ。悲劇を哲学して、悲劇を食つて生き抜くことなんか、この男からは凡そ遠いんですね。悲劇に圧倒されてしまつて呼吸困難におちいつてゐるんですからね、不幸な男ですよ。」

久留米は急に小さな眼をきらりと光らせると、

「ありや壮健の書いたものだ。」

と嘯みつくやうに言つた。

「それで、君は、癩患者だつてのわ。」

「シエストフの体は腐らないんだよ。死ぬまで生きてゐられるんだ、あいつあ。俺達は死ぬ前に既に息を引取つてるんだ。体が腐るんだからな。」

「精神が腐るか？」

「精神が腐らなかつたつて体は腐るんだ。体の腐らん奴が書いたものなんかこの病院で通用するもんか。俺だつて体が腐らなけりやもつと物凄い論理をひねり出して見せる。体の腐らん奴はどんな論理でもひつ放しが出来るんだ。都合が悪けりや転向すりやいいんぢやないか。俺はもつと切迫してゐるんだ。思想か思想自体の内部でどんなに苦しんだつて、たかが知れてらあ。」

患者たちの内面の奥深くに憤怒のようなものを秘めた、なんと凄絶を極めた会話ではないか。やわな思想など木っ端微塵に吹き飛ばしてしまう。

5 結論

作者である北條民雄自身と小説の主人公たちの人格や資質を峻別しなければならぬことは言うまでもないが、3人の対話に耳を傾けていると、北條自身が、シェストフの『悲劇の哲学』を深く読み込んで理解していなければ、このような対話表現にはならないことも明らかであろう。それだけ、北條はシェストフの思想自体に深く分け入り、それを批判的に検証しているのである。

北條の真剣さに、石原吉郎が付き合わないはずがない。少なくとも小説においては、北條が批判的に関わった『悲劇の哲学』の濁流を溯及して、北條の思想の水源にふれたいと考えたのもうなずけるであろう。こうして石原が、北條に導かれてシェストフへ、シェストフに導かれてドストエフスキーへ、ドストエフスキーに導かれてカール・バルトや聖書へと導かれた道程が見えてくる。

私は、それを有機的読書に導かれた有機的邂逅の軌跡と呼びたいのである。一人の人格との出会いは、その人格と有機的に関わる他の人格との数知れない邂逅をももたらしてくれることになる。それが、文学を読むことにおける最大の恩寵なのである。

¹ 『石原吉郎詩集』、思潮社、1969年。

² 『新選 石原吉郎詩集』、思潮社、1979年。

³ 石原吉郎著『断念の海から』、日本キリスト教団出版局、1976年。

⁴ 石原吉郎著『北鎌倉』、花神社、1978年。

⁵ 安西均編著『石原吉郎の詩の世界』、教文館、1981年、119—121ページ。

⁶ 『石原吉郎全集Ⅲ』、花神社、1980年、509ページ。

⁷ 『世界 日本 キリスト教文学事典』、教文館、1994年、「シェストフ」の項。

⁸ シェストフ著、河上徹太郎・阿部六郎訳『悲劇の哲学』、芝書店、1934年、44ページ。

⁹ 同上、115ページ。

¹⁰ 同上、131ページ。

¹¹ 同上、154—155ページ。

¹² 『石原吉郎全集Ⅲ』、509ページ。

¹³ 『北條民雄全集』下巻、創元社、1938年、497ページ。

¹⁴ 『石原吉郎全集Ⅲ』、509ページ。

¹⁵ 『石原吉郎全集Ⅱ』、1980年、397ページ。

¹⁶ 北條民雄著『いのちの初夜』、創元社、1936年。

¹⁷ 『北條民雄全集』全2巻、1938年。

¹⁸ 『石原吉郎全集Ⅱ』、397—399ページ、エッセイ集『断念の海から』所収。

¹⁹ 同上、399ページ。

²⁰ 『北條民雄全集』上巻、114—116ページ

(引用に際して、旧漢字は新漢字にしたが、歴史的仮名遣いはそのままにした)。

(Received: December 31, 2008)

(Issued in internet Edition: February 8, 2009)